慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宗教社會學：學説・研究(古野清人著, 河出書房發行)
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.179- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

樣纏められたのは吾々に先づ悅びを與へる。道野氏との間にとりかはされた支那銅器時代有無に關する論爭を始めとして支那の古鏡の沿革、殷虛出土の戈系利器の考察、白色土器の研究、亦新發見の戰國時代の釉藥ある明器、漢代の玻璃、漆奩、戰國時代らしき傳長沙出土の木彫怪獸像等に關する興趣深き紹介を始めとして東亞の古瓦に就ての總括的記述、歐米博物館の支那古美術蒐藏品に就ての概述等極めて有益なる記文が順序よく排列せられてをる。殊に著者によつて當時初めてその眞相を窺ひ得た安陽侯家莊殷代墳墓の發掘の紹介など金村古墓の記述と相待つて古代史研究者必讀の文字である。たゞ本書を通じて望蜀の嘆に堪えなかつたのは著者が親しく支那內地の發掘に手を下し實證的に支那考古學の開拓に當られることが事變前に於て自由でなく爲に何となく推論に薄物を隔てて物を見る觀のあることである。今や幸に事變は日本側に有利にして我國學者にして奮發すれば支那內地發掘可能の狀態にある。吾人は本書の著者が大發掘團を督し敢然安陽其他の遺跡發掘に着手せられん日の一日も早く到來せんことを期待してやまない。百の論議は一の正確精密なる發掘によつて解決される。此點考古學は誠に有利な立場である。たゞ中央研究院に見る如く國內の俊秀を網羅し一丸となした最高學術機關が此重要な發掘事業の當ると云ふことが我國の學界の如く四離滅裂、統一協同の精神の缺けた現狀をもつて果して實現可能かと云ふ問題である。最近或事件により在外學術關係者達の狹量に驚いた吾人は日本人の島國根性、非寬容性、繩張り主義が大陸の文化的開拓に多大の支障をなすことを今から危惧せざるを得ない。吾々は日本に於ける文化科學が近代的な組織化の道程をとり、その封建的の殘骸を一日も早く打破せんことを希望する。日本の學者は各自その象牙の塔を出で、今少し相接觸し、總親和の實を擧ぐる樣努力すべきではなからうか。專門學が發達するのは諸學問の相互提携が完全に行はれることを前程とする。協調が行はれずして互ひに障壁を高くし專門呼ばはりをするのはいさゝか筋違ひである。（松本信廣）

宗教社會學——學說・研究（古野清人著 河出書房發行）

嚮にデュルケムの名著「宗教生活の原初形態」を譯出して、學界に大きな貢獻をされた著者が、宗教の社會學的研究のデュルケムに至る過程と、彼の偉業を繼承するデュルケミアンの現況・動向と、更にデュルケイミスムの發展のための著者自らの研究とを、一卷に纏められたのがこの書である。

本書の內容を目次的に紹介すれば、第一篇宗教社會學說が六節に分れ、先づ「宗教社會學の略史」では、筆をルネサンスに起してド・ブロスやフュステル・ド・クランジュ等がデュルケムの先驅として、正しい位置を與へられてゐる。次でデュルケムの學說に對する的確な紹介が行はれた後、デュルケイミスムの發展が敍され、中に就て重要なデュルケムの後繼者モスの學說が詳細に紹介されてゐる。更に「新フランス學派の宗教學說」に於て、ユベル、モス、ザルノウスキ、ダギ、モレ、グラネ、アルバク、エルツ、ブグレ、ベイエ、モニエ、シミアン筆に對する鳥瞰が行はれ、最

後に「宗教社會學的研究の動向」の題下に、フランス國内の動きと共に、對外的な影響が看取されてゐる――著者が我國への影響を逸されたのは千慮の一失か――

第二篇、社會學的研究は「原始經濟に於ける呪術・宗教的要素」「宗教儀禮に於ける社會的拘束性」「宗教神話の社會學的考察――特に神話と祭儀との關連について――」「宗教的エクズタズの研究――特にその原初形態について――」「神祕主義の社會學」「未開社會に於けるオルダリの一形態」の六論文より成る。

吾々はこの書によつてフランス社會學派の宗教研究を系統的に鳥瞰、把握することが出來、更にその方法論を以てする研究の實例を見ることが出來る。その意味でこの上なく有難い書物であつて、著者の該博な學識には多大の敬意を拂ふものである。

たゞ讀後の感想を忌憚なく記させて戴けば、「アンリ・ポアンカレと共に科學は方法にあると確信する」と明言されてゐる著者が、フランス社會學派以外の方法論に極めて冷淡なことである。例へば、「勿論、われらはドイツに於て、且またその影響に立つ外國の學徒の間に於ても、トレルチやマックス・ウェーバーの所說が、斯學の典型と看做され勝であることを知らないではない。實證主義を排擊し神學的臭味の餘りに濃いトレルチの所論は暫く措くとして、ウェーバーは先づ優秀な經濟學者であるほどに宗教學的な蘊蓄を有したかは疑問である。又その宗教社會學的研究は特別に愛好した題目プロテスタンチスムと資本主義との關連についてみても把握の方法が實證的精神によつてゐるとは斷じえない」（三頁）とか、「アントロポスのカトリクの學者殊にヰルヘルム・シュミット師らの反デュルケイミスムは信仰的立場の相違に負ふところ多大である」（七八頁）等々。「われらはデュルケム宗教學說に對する、多方面からの攻擊と非難とをよく知つてゐる。しかし更によく知つてゐるのは、何人が如何なる立場にあつて如何なる批評をなしてゐるかと云ふことである」（七八頁）といふ批評の態度には何か派閥的な感情のみ先立つてゐる樣に思ふ。若し眞にフランス學派の學說が「肯綮に當つてゐる」ものだとすれば、他派に對する學問的批判はいよ〳〵その點を明確にするに相違ない。上の如き著者の行き方からは、誰か耽溺の危險なしと言ひ切ることが出來やう。この點著者の再考を切望したい。

尙ほ著者の「研究」が、專ら外人の蒐集になる資料にのみ賴られてゐるのも如何かと思ふ。わが周圍民族の生々しい資料に據られるならば、その研究は更に淸新さを加へるのではないであらうか。殊に日本民族學の發展のためにも、著者の如き理論的知識に豐かな人々が、實地研究に進出されることが望ましいと思ふ。

ともかく、本書が宗教社會學、民族學における貴重な文獻の一つであることは論を俟たない。これを江湖に推奬すると共に、著者の文運愈々隆盛ならんことを祈つて筆を擱く。妄言多謝。

（中井信彥）

洋學論（高橋磌一著　三笠書房發行）

日本歷史全書の一册（第二十卷）として、高橋磌一氏擔當の「洋學論」が出版された。これによつて、近來愈々盛んになつて來て